29　次の文章は、佐藤泰志の小説『海炭市叙景』の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。 〈大阪大〉　二〇一六年度出題

　待った。ただひたすら兄の下山を待ち続けた。まるでそれが、わたしの人生の唯一の目的のように。今となっては、そう、いうべきだろう。

　冬の夕暮れが急速に近づいている。そろそろ見切りをつけるべきかもしれない。そのきっかけがわたしには見つからなかった。第一、まだ希望を持っていた。ロープウェイの正面玄関のガラス戸に、雪まみれの兄のこごえた、けれどもあの明るい笑顔がひょっこりあらわれるのが眼に浮かぶ。わたしは喜んでけ寄り、笑顔のまますねたように、遅いじゃない、とと甘えの混った声で兄をなじるふりをするだろう。もっとやきもきさせてやればよかったかな、とでも兄はいうかもしれない。はにかんだ表情を一度心に沈めこんで、それを見せまいと皮肉っぽい口調になる。それがわたしの知っている兄だ。⑴あれこれ想像すると、際限もなくふくらみ続けてしまいそうだ。

　ロープウェイの売店の少女は、木製のベンチに腰かけているわたしを、最初、い眼つきで眺め、ついでことさら無視しようとし、今では薄気味悪い動物でも見るように、時々、そわそわした視線を向けるだけになった。チケット売場の中年の顔色の悪い女もだ。無理もない。

　待合室がにぎわったのは、夜明け前と昼すぎの下りのロープウェイの到着までだった。その後、山に登る人も下る人もいない。わたしたちと共に、初日の出を眺めるために、海峡に突きでた、たった三百八十九メートルの山に登った人々は、もうすべて家へ帰ってしまった。今頃はあらためて、温かい部屋で新年を祝っているだろう。うらやんではいない。わたしたちとは違うというだけだ。

　確かにわたしだけが、うすら寒いベンチにっているのは、売店の少女やチケット売場の女でなくとも、さぞ異様に思えたに違いない。なにしろ元旦なのだ。でも、そんなこともどうでもいいことだ。他人が見れば、たとえなんであれ、どんなふうにでも見えるものだ。二十一年間でそんなことはもう、たっぷりと学んだ。

　むしろ⑵わたしは自分の心にあきれていた。俺は歩いて下山する、子供の時から歩きなれた山だ、一時間かそこらあれば会える。山頂の下りのロープウェイの前で、自信に満ちた声で兄はいった。それから何時間かたって、もしかしたら、とんでもない異変が起きたのではないかと気づいたのに、まだわたしは待っている。そのとても奇妙な心が自分でもわからなかった。売店の少女やチケット売りの女が、わたしを異様な眼差しで見つめるより何倍も、わたしは自分を異様に思っていた。まるで人ごとのようにだ。だから、ふたりの女の視線は気にならなかった。

　初日の出を見に山へ行こう、と最初にいいだしたのは兄だった。いいわね、とわたしは本心で答えた。素晴らしい思いつきだ。すぐふたりで、六畳ひと間のアパートの部屋中を捜して、ありったけのお金を集めた。コーヒーの空瓶に入っていた一円や五円や十円硬貨。ズボンやオーバーのポケットも洗いざらい捜した。それはちょっとした宝捜しの気分で、ひさしぶりにわたしはうきうきした。思いがけず百円硬貨が出てきたりすると、ふたりで声をあげて笑ったりした。全部で二千六百円ほどあった。それを畳の上に一ヶ所にまとめ、またわたしたちはそれを眺めて笑いあった。二ヶ月前、二十七になったばかりの兄は、これほど金がないとむしろせいせいするな、と陽気にいったものだ。いかにも兄だった。

　おまえは夜景を眺めたことは何度ある、とそれから兄はたずねた。そうね、一度だけのような気がするわ、とわたしは考えるふりをしたあとでいった。高校生の時、花火大会を観にクラスメイトと三、四人で行ったことがあるの、あとは覚えていないわね、兄さんはどうなの。兄は、そうだな、俺は一度もない、と答えた。それでまた笑いあった。

　夏の観光シーズンには、他の土地からたくさんの人たちが夜景を見る目的であわただしくやって来る。人口三十五万のこの街に住んでいる人々は、その夜景の無数の光のひとつでしかない。光がひとつ消えることや、ひとつ増えることは、ここを訪れる人にとって、どうでもいいことに違いない。⑶それをめることは誰にもできない。

　考えてみれば、兄は山に登るどころか、地下で働く日々を送ってきたのだ。去年の春、兄の勤めていた小さな炭鉱は閉山した。組合は会社の一方的な閉山宣告にして、デモや市への陳情を繰り返し、自分たちの力だけで石炭を掘り続ける組織作りをしたが、二ヶ月もすると誰もが見切りをつけてしまった。デマや中傷や分裂。まるであっというまに夏の暑い季節がすぎさったように熱意を失ってしまった。人々に残ったのは、濃い疲労と沈黙、わずかな退職金だけだった。かわりに職安に人があふれた。

　元々、海と炭鉱しかない街だ。それに造船所と国鉄だった。そのどれもが、将来性を失っているのは子供でも知っていた。今では国鉄はＪＲになってしまったし、造船所はボーナスの大幅カットと合理化をめぐって長期のストライキに突入したままだ。兄の炭鉱でも、将来の見通しを一番身近に感じていたのは、おそらく組合員自身だったろう。街は観光客のおこぼれに頼る他ない。

　わたしたちの父も鉱夫で、ささいな事故のために死んだ。兄が高校生の時だ。母はわたしたちが幼かった頃、家を出てしまった。その理由をたずねると、父は不意に不機嫌になり、酒量が増したものだ。いつしかわたしたちは、母の不在はとうてい子供の手の届かない、父の沈黙の部分にある深い傷と密接につながっているのだ、と子供心にも了解した。とにかく父が死んでから、母のいなくなった理由をたずねる相手がなくなったという、変ないびつな自由を得たが、兄は高校を中退せざるを得なかった。父のかわりに見習い鉱夫に採用され、兄妹ふたりだけの生活がはじまった。

　兄はたくましく、健康だった。わたしにはしく見えるほどだった。

　除夜の鐘が鳴り終ってから、わたしたちはありったけのお金を持って、釈迦町のアパートを出た。ロープウェイの発着所までかなりの距離だったが苦にはならなかった。兄はセーターの上にヤッケをはおり、わたしは紺色のオーバーに毛糸のマフラーをぐるぐる首に巻き、雪道のバス通りを歩いて行った。不思議と寒くはなく、むしろ歩くほどに汗ばんで、わたしははしゃぎながら兄の腕にすがるようにして歩いた。そんなわたしに、兄はしきりに照れた。それがまた、わたしを快活にした。みっともない、と兄はいい、何をいっているのよ、とわたしはますます腕を絡ませ、身体をぴったり寄せた。兄の力強い心臓の鼓動が、夜明け前の雪道で聞こえそうな気がし、幸福だった。

　途中で、タクシーが一台とまった。運転手がガラスを降ろして、どこまで行くのか、と訊いた。山、とだけ兄が答えた。ふもとまで乗って行かないか、奥さんのこともすこしは考えろ、と運転手はいった。思わず吹きだしそうになった。それなのに兄ときたら真面目くさって、女房は車に酔うのだ、と答えたものだ。仕方がないな、といったふうに運転手は首を振り、奥さん、気をつけて行きなさい、と大声をだした。とうとうこらえきれずにわたしは吹きだしてしまった。ありがとう、と兄は運転手に張りのある声をだした。別に礼をいわれるすじはない、とその運転手はいった。

　タクシーが繁華街のほうに姿を消してからも、わたしの笑いはおさまらなかった。二十一回のわたしの正月のうちで、一番いい正月だと思った。

　今でも、そう思っている。

　雪が激しくなった。あと五分で、六時間、わたしはベンチに坐っていたことになる。二十一年間と六時間。わたしはその⑷ふたつの時間を考えたりする。

　売店の少女が、切符売りの女の所へ行って、何か小声で話している。それからふたりで、わたしをじろじろ見た。何度目だろう。それにしても、なぜわたしはこうして、手をこまねいて待っているのだろう。そうだ。あと五分。それだけ待とう。

問１　傍線部⑴について、どのような想像がふくらみ続けるのか、説明せよ。

問２　傍線部⑵において、「わたし」が「自分の心にあきれていた」のはなぜだと思われるか、説明せよ。

問３　傍線部⑶において、「わたし」はなぜこのような発言をするのか、「それ」の内容を明示したうえで説明せよ。

◎問４　傍線部⑷について、なぜ「ふたつの時間」として「わたし」は考えるのか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　兄が、ロープウェイ乗り場にＡひょっこりあらわれ、Ｂ安堵と甘えを交えてなじるふりをする「わたし」と、Ａ照れくさそうな顔を見せまいと皮肉っぽい口調になるいつもの兄との Ｃこれまでも繰りひろげてきたやりとり。

Ａ＝４〔兄の様子が普段どおりであることが、解答の中にあること。〕

Ｂ＝３〔「安堵」は「安心して・ほっとして」などでも可。「なじる」は「責める」でも可。ただし、「ふり・素振り」が必要。〕

Ｃ＝３〔「今までと同じような」でも可。〕

問２　一時間程度で下山するといった兄が、まだ下山せず、どう考えても、Ａ兄の身に命に関わる異変が起きていることは確実であると気づいていながら、Ｂ心が動かず、助けを求めずに、こうして麓のロープウェイ乗り場のベンチでＣ待ち続けようとしている気持ちは異様であったから。

ＡとＣがそろっていなければ全体０。

Ａ＝３〔「遭難したのではないかと思っていながら」なども可。〕

Ｂ＝４〔「捜索を求める行動に出ようという気持ちにならず」なども可。〕

Ｃ＝３

問３　夜景を見にやってくるＡ観光客はただ、風景としての光の美しさを楽しむだけで、Ｂこの街の置かれている希望のない状況や、その家々の光の明滅に象徴される人々の人生の浮き沈みや、自分たち兄妹の存在Ｂにまで考えを巡らすことがないことはＣ当然だと思えるぐらい、自分たちはＤ世の中から見捨てられてきたと感じているから。

Ａ・Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔「夜景を見る目的で訪れ」でも可。〕

Ｂ＝３〔街全体の状況とその中の人々の人生や生活に言及すること。「考えを巡らすことがない」は「無関心であること」などでも可。〕

Ｃ＝２〔「非難などできない」なども可。〕

Ｄ＝３〔「省みられていない」「置いて行かれている」「取り残されている」なども可。〕

問４　Ａ二十一年間の人生はつらく厳しく、社会的にも恵まれないものであったが、たくましく健康なＢ兄のおかげで何とか生きてきた、流れ過ぎたＢ日常であったのに対して、ロープウェイの発着所で待っているＣ六時間は、直前の兄との濃密で愉快な時間を過ごしたことを一人で反芻することで、Ｄ幸福感に浸ることができた特別の時間だから。

ＡとＣとＤがそろっていなければ全体０。

Ａ＝２〔「家族を失い、仕事を失う不幸が続く」など具体的解答も可。〕

Ｂ＝２〔「やり過ごしてきた」「幸せを感じることのなかった」も可。〕

Ｃ＝４〔「待つことで兄との楽しいやりとりを想像し続けられる」も可。〕

Ｄ＝２〔Ｂとの対比が解答に示されること。〕